

## 所員となって

西澤 由隆

横浜キャンパスでの今年のクリスマス礼拝に家族を連れて参加したときだった、キリスト教研究所の所長の加山先生から、所員として一緒に活動しないかとお誘いを受けたのは。私は、明治学院に就職して今年で8年目になるが、キリスト教主義教育の在り方についてかねてから少なからず関心を持っていたので、そのお誘いに応じることにした。関心を同じくする方々とのキャンパスでの交流の「きっかけ」を探していたところでもあったので、そのお誘いをありがたくも思った。

さて、自己紹介をするようにとのことであるが、あらためて自分とキリスト教との関わりを振り返るとき、それがいつも消極的だったことを告白しなければならない。

私は、中学から大学まで、キリスト教主義をその教育理念としたキャンパスに学んできた。もっとも、積極的にそのような教育環境を求めて学校を選んだのではない。たまたま選んだ中学校がそのような教育をしていたというのだった。したがって、出席が義務づけられていた礼拝にも、すくなくとも最

初のうちはけっして積極的に出席したのでもなかった。それでも、キリスト教を信仰のよりどころとして世のために具体的に活動をしている人々のお話を週3回聞くうちに、少しずつ共感を覚えるようになったものだった。

8年前に明治学院の法学部の教員公募に応募したときもそうである。明治学院がキリスト教主義の教育を行っていることを知ったのは、公募書類を用意するに当たって取り寄せた大学案内を見たときだった。もっとも、それは私には嬉しい発見だった。自分が共感を覚えた教育環境とその主義を共有するキャンパスで教職につけるかもしれないと、希望を膨らませたものだった。だから、着任の年の入学式に讃美歌を聞いたときのすがすがしい感動を今も忘れていない。

このたびは、キリスト教主義教育の在り方についてみなさんと一緒に考える機会を与えられ、嬉しく思っている。このような「消極的」な所員だが、よろしくご指導いただきたくお願いするしだいである。

(にしざわ よしたか  
所員、法学部助教授)